

地域鉄道における車窓景観と風景認知に関する研究 ～えちぜん鉄道三国芦原線を事例として～

都市空間生成研究室
1741169 山崎 翔史

地域鉄道 存在価値 車窓風景
えちぜん鉄道 風景認知 利用者アンケート

1. 研究の目的と背景

近年では、約 7 割の地域鉄道事業者が鉄軌道業の経常収支ベースで赤字を計上する(平成 30 年度¹⁾)など、厳しい経営状況が続いている。そのような状況から、路線廃止や運行区間の短縮等の議論がなされるが、多くの場合は利用者数の推移や運行コスト比較など、直接的な利用価値が主な評価軸となっている。しかし、地域鉄道は、生活者に欠かせない交通インフラであることに加えて、異なる地域を結ぶという特性から、車内や駅は人々が集う交流の場となること、車内からの風景やまちの風景として車体を揺らして走る姿が人々の心に刻まれるといったような要素が入り混じっており、実際の利用実態とは異なる視点を持つことも必要だと考えられる。

本研究では、沿線地域の空間分析を行うこと、さらに利用者を対象としたアンケート調査を実施することから、車窓・沿線風景の現況と利用者の抱く風景イメージを明らかにすることを目的とする。以上より、地域鉄道における存在価値において、車窓風景が重要な視点であることを考察し、今後の地域鉄道の存在価値検討の基礎的知見を得る。

2. 研究の方法

本研究では、視覚的かつ印象に残りやすい車窓・沿線風景に焦点当て、鉄道利用者が、どのような印象的な風景を抱いているのか、なぜ印象的な風景であるのかについてアンケート調査を実施し、結果より得られた景観は、鉄道利用者の利用価値向上に寄与し、地域鉄道の存在価値としての観点に結びつくのではないだろうかという仮説に立っている。これを実証するため、次の順序で研究を進める。

- ①現況調査
- ②沿線地域における空間分析
 - ②-1 景観計画調査
 - ②-2 都市計画区域区分調査
 - ②-3 車窓撮影調査
- ③車窓・沿線風景に関するアンケート調査

3. 空間分析

3-1. 調査の方法

三国芦原線の沿線自治体(福井市、あわら市、坂井市)において、都市計画区域区分調査、景観計画調査、車窓動画より切り出した静止画の分析より空間分析を行った。

3-2. 景観計画調査

車窓・沿線景観保全の現況を整理するために、沿線自治体の景観計画を調査した。結果、沿線自治体ではあわら市景観計画²⁾において、鉄道の車窓や沿線風景を意識した景観形成に向けた取り組みが行われていることが明らかとなった。

3-3. 都市計画区域区分調査

都市計画区域区分による車窓景観の変化を把握するために調査を行った。結果、用途地域指定エリアと未指定エリアの混在が見られた。このことから、車窓景観が変化に富んでおり、利用者の印象的に残りやすい景観であることが考えられる。

3-4. 車窓風景撮影調査

現況の車窓風景の把握するために、現地にて車窓動画を撮影した。表 1 に調査概要を示す。撮影方法は、利用者が座席から車窓を眺める視点に近い床上 120cm の高さにカメラを設置し、側面部と前面部において全区間を撮影した。

表 1. 調査概要

実施日	区間	時刻	撮影場所
11月24日(火)	三国港→福井	10:09→11:01	側面(右)
	福井→三国港	11:09→11:58	側面(右)
	三国港→福井	12:09→13:01	前面
	福井→三国港	13:09→13:58	前面

結果から、三国芦原線の車窓景観は、都市景観・自然景観・生活景観が混在しており、7つの景観類型に分類された。よって、変化に富んだ魅力的な景観要素を有しており、第3章における都市計画区域区分調査の結果と概ね一致していることから、利用者の印象的に残りやすい景観であると考えられる。

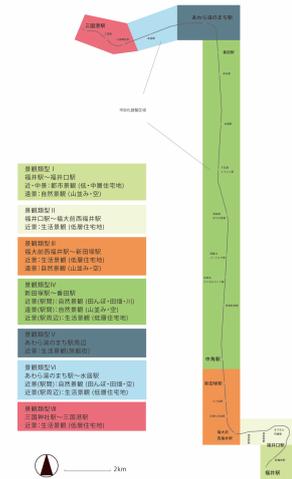


図1. 景観類型マップ

さらに、特徴的な沿線風景では、沿線住民の生活する様子や景観に人の動きが加わる様子が抽出された。

4. アンケート調査

4-1. 調査の方法

三国芦原線の各駅（福井駅、田原町駅、八ツ島駅、あわら湯のまち駅、三国駅、三国港駅）にて、乗車待ちや電車から降りてきた利用者を対象にアンケートを実施した。質問項目は、質問1：利用実態、質問2：印象的な車窓・沿線風景とその区間と理由、質問3：個人属性を尋ねた。

表2. 調査概要

紙面によるアンケート				
調査手法	紙面によるアンケート			
実施場所	三国芦原線各駅 (三国港駅・あわら湯のまち駅・八ツ島駅・福井駅・田原町駅・三国駅)			
調査時期	2020年11月22日～11月25日			
調査対象者	三国芦原線利用者			
質問項目と回答方式	質問1	1-1	利用頻度	選択式
		1-2	利用目的	
		1-3	利用時間帯	
		1-4	利用区間	
	質問2	2-1	印象的な車窓・沿線風景の様子	記述式
		2-2	その風景が印象的な理由	
		2-3	その風景がある区間	
		2-4	総合的な風景の好ましさ	
	質問3	3-1	性別	選択式(5段階)
		3-2	年代	
		3-3	職業	
		3-4	居住地	

4-2. 調査結果

回答は全部で51票、そのうち有効回答票は43票であった。質問2において、印象的な風景の回答があったのは、36票で、利用頻度別に集計を行うと、日常利用者が17人、非日常利用者が9人であった。また、風景要素の集計を行うと、田んぼなど「自然風景」が最多であった。風景要素を回答者の利用頻度・居住地別に集

表3. 風景要素と利用頻度・居住地

利用頻度	居住地	風景要素	回答者(人)	回答例
日常利用 25	(1)沿線地域	自然風景	7	あまのつた、田んぼ、そばの花・山、田舎、芝桜
		田んぼ	2	田んぼ、田んぼのよみ自然のある田んぼ
		特定の建物	2	ドーム型の建物
		自然風景と構造物	4	橋、あまのつた、大黒川、津波の跡、水田
		その他	4	田舎のざびー、まっすで、川端のそば、海のかおり
	(2)福井県	自然風景	3	朝の山、田んぼや緑の色
		田んぼ	3	建物の隙間から電線が見える様子
		特定の建物	0	
		自然風景と構造物	0	
		その他	0	
非日常利用 22	(3)沿線地域	自然風景	6	田舎・芝桜・大黒川・津波の跡の芝桜
		田んぼ	1	駅周辺の田んぼ
		特定の建物	0	
		自然風景と構造物	0	
		その他	0	
	(4)福井県	自然風景	2	海、森林、田んぼ
		田んぼ	1	車窓と田んぼ
		特定の建物	2	津波の跡、福井大学、遠くから観望できる光景
		自然風景と構造物	1	橋
		その他	0	
(5)その他の地域	自然風景	6	紅葉や田んぼ、鳥、田舎、畑	
	田んぼ	0		
	特定の建物	2	お城のような建物、役所や農協の建物	
	自然風景と構造物	0		
	その他	1	駅	
		合計	47	※臨時時代の臨時乗客

計すると、利用頻度を問わず、特に沿線地域と福井県内の利用者は多様な景観要素を認知していると分かった。

印象的な車窓風景とその理由では、①個人の趣向や記憶を通じた回答と②風景から捉えた印象をそのまま回答したものに大別されたことから、利用者が車窓を視点場として認知していると言える。

(2) 日常かつ福井県の利用者



図2. 印象的な風景要素とその理由(抜粋)

風景の総合的な評価を5段階で行うと、平均3.8点となった。その理由では、記憶に残らない(2点)のような悪い印象も挙げられたが、見慣れている景色で落ち着く(4点)のような良い印象も挙げられた。このことから、利用者目線から現況の車窓風景は概ね好ましい風景であり、利用者によっては安心感を与える要素であることが言える。

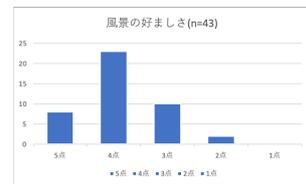


図3. 総合的な風景の好ましさ

5. 結論

第3章、第4章における空間分析より、三国芦原線の車窓景観は、都市景観・自然景観・生活景観が混在しており、変化に富んだ景観であると言える。第6章では、利用頻度や居住地に関わらず、利用者の8割以上が印象的な車窓・沿線風景を回答しており、利用者にとっても魅力的な風景要素を有していると考えられる。さらに、利用頻度と居住地で分類を行うと、風景要素の差異が現れたことから、特に沿線地域住民や福井県民において、車窓景観を視点場とした風景認知が行われており、この行為が鉄道利用により自然発生的に起きていると言える。これら結果は、地域鉄道の車窓風景を利用者が強く意識していることを示しており、このような鉄道と利用者との関係性は、地域鉄道の存在価値検討において重要な視点であると考えられる。今後の調査では、存在価値検討における他の要素を加えること、利用者視点を取り入れた調査を進めることで地域鉄道における存在価値検討の軸が定まると考えられる。

参考文献

- 国土交通省ホームページ, 「地域鉄道対策」, https://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk5_000002.html, (最終閲覧日: 2021年1月)
- あわら市土木建設課: あわら市景観計画, あわら市土木建設課, p15